

今回は、比叡山延暦寺を考古学から見てみます。

延暦寺の発掘調査は、大正12年（1923）にさかのぼり、比叡山山頂や横川で偶然に発見された経塚の報告などがあります。その後、戦後の建物保存修理に伴う発掘調査が行われています。調査は、四明ヶ岳遺跡・東塔地域・西塔地域・横川地域・飯室地域に及び、平安時代から鎌倉時代の遺構が部分的に検出され、それに伴う遺物も出土しました。

平安時代から鎌倉時代の遺構として確認できたものは、西塔の建物群がありまは、山間での建物を建てるためには平坦地の確保が必要で、建て替えのたびに山を削ったり谷を埋めたりして造成し、平坦地の拡大を図っていることがわかりました。また、平安時代の建物は基本的に瓦葺きではなかったようですが、法華総持院では瓦のまじり、部分のみ瓦を使用したことがう

かがえます。

出土土器は、同時期の一般集落におけるあり方とは大きく異なっており、甕・鍋などはほとんど出土せず、甕が大半を占めています。食器（碗）がほとんど見られないことから、少なくとも調査地点においては調理行為が行われていなかったこと、しかし食事をとる人数は少なかつたことがわかります。調理場は別の場所にあったのでしょうか。室町時代では、西塔地区において、2回にわたって地面が焼けているのが確認されました。これを火事の記録と照合することにより、常行堂・法華堂の前身の可能性を持つ建物群が、文永8年（1227）以降元龜2年（1571）の織田信長による焼き討ちまでの間に存在していた可能性が出てきました。文献記録の不足を補う、大きな成果といえます。

近世では、18世紀ごろの僧坊の平面形状が明らかになりました。坂本にある「坂本里坊」と類似した建物だったよ

## 考古学から見る延暦寺



延暦寺大講堂付近で見つかった国家鎮護の儀式跡

うです。また、寛永年間に再建され、昭和31年（1956）に焼失した大講堂の周辺からは、安鎮法に基づいて国執り行われたのではないかと考えられています。僧坊群跡からは18世紀から19世紀の日常生活に使用されたと思われる遺物が出土しました。その

中には飯茶碗なども多いのですが、特に煎茶に使われる茶器がまじり、土器としており、道具の質の高さから、ここで修行していた僧たちの格の高さがうかがえます。

延暦寺関連の文化財に目を向けると、比叡山を神体山として発展し、天皇家を始め多くの人々の崇敬を集め、3800力所以上におよぶ末社がある日吉神社、安土桃山時代から江戸時代初頭にかけて、山中で修行を終えた老僧が隠居するための住居として構えた「里坊」に伴う庭園である延暦寺里坊庭園などがあります。これらの文化財も、大きくとらえると、延暦寺遺跡の一部です。もし、みなさんが一つの遺跡に興味を持たれたなら、発掘調査報告書を開いてみてください。発掘調査の成果とともに、歴史の環境・地理的環境についても詳しく書かれています。そして、周辺にはその遺跡と有機的に結びついた遺跡や史跡が広がっていることがわかると思えます。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 坂下 実）

## 結び付く地理や歴史的環境